



へっぽこ

教官の催眠忍術!?

雪泉+詠編

●ストーリー付きCG集
Black and White

こんにちは、俺は忍学生達の指導をしている教官だ
そう、とても優れた教官だ

それなのに、最近は受け持つ生徒が1人もいなかった

そんな時に
ある巻き物と出会った…


「猿でもできる催眠忍術」

そんなわけで

この忍術を使うために以前から目をつけていた

生徒の雪泉（ゆみ）に試したところ

見事に成功した。



それからは、とんとん拍子に
話はすすんでいき、とうとう授業(エッチ)を
実行することができた。

催眠忍法に感謝だな。

そして初めての授業(エッチ)から2日後
今は雪泉とまた会う約束をしていた

うん、大丈夫だよな…

まだ催眠忍法、かかっているよね？

いきなりお縄になったり、攻撃されたりしないよね？
そんな心配をしつつ、待ち合わせの
俺の部屋へといった…

「教官、お待ちしております！」

「んん？ああ、待たせたな雪泉

随分と気合が入っているみたいだけど」

「はい！」

「前回の授業から色々勉強しました
今回もよろしく願います！」

「ぞ、そうか…」

「それは楽しみだ」

「はい、今回も…」

「よろしく願います！」

「いちごさんさようしょ〜」

「はい、どはっ〜」







「あー、雪泉さん？」

「ふっふっふ…」

前回の反省を踏まえて
今回は本気でいかせていただきますー！」

「えーと、これからするのは
特別授業…たよね？」

たっぴん



オキッ

「ほっー
ぽっぽっぽっぽっー」



「では、まずは接吻からです
私も色々勉強しましたので
試させて頂きます。」

「めいばら...」

めいばら
めいばら



「...あは...あは...」
「...うん...うん...」

「うん、たごととしら感じだけど
これほいわどららな」



「んっ…はぁ…」

「ちよっと難いんですけどね…」

「そっとな、こわは慣れてくれば

もっと上手くなるはずだ」

「うんう…そっですか…」

「…と練習しますね」

んっ

んっ

んっ

「でも…んツ…これいいですね…
なんだか幸せな気持ちになります」

「ああ、それ」これは授業の
最初としては順当な行為だからな」

「はい…」

「ではさるさる次」

「参りますね…んふっ…」

わんわん

わんわん

わんわん



「むっ…」

「では、前回のリベンジをさせて頂きますね」

「そっちは」

「前回はあまり上手くできなかったな」

ぎゅっ

「はい、そのとおり
今回は頑張らせて
頂きます！」



「まずは、こう挟みまして
次に胸全体を使ってもみあげます」

「んっ！
ああいい感じだ…」

もみ
もみ

「はい、やさしく包まいたでっつと
次は…」





「んっ…ぬっちゅ
口を舌を使って…強く吸ってっ…」

「んあっ！これは…確かに
前回よりも確実によくなっているな」

ちゅっ

まに
まに

「んっ」

「うん、教官…」

「頑張っているのですが、これでは射精しないのでしょうか？」

「そっだな」

「気持ちいいのは確かだけど刺激や吸い込みが弱いかな」

「刺激と吸い込みですか？」

「勉強不足でしたね… 次の課題にいたします」

「それで次は、どうするっ？」

ちゅぽ、
ぐりゅ、

「はい、では横になってください
私が上になりますので」



「んっ!あっ…
はあああああ…入りました!
今回は私からさせて頂きますね」

「うおっ…これは…
中がうねっつらつて
凄いと」なっつらつらな

「はい、準備は
できておりましたので
動きますね」

あ
ん



「はっ……はっ……
はっ……はっ……」

「あっ……やあ……
どうでしよつか……
んんっ……」

「気持ちさらさらでしよつかっ」

「そっとな
とても頑張ってる
偉いぞっ」

「ー？」

「ありがとっいっせからますっー」

「ああ、だぞっ」

104
3.0
104

104
3.0
104





「ちょっと動きが弱いかな？
では、そろそろ
ここらからも動いっかな」

「えっ！」

「あっ、ちよっ…」

「教官、ま、まっすぐください」

「おっ、雪菜も感じてきたかな〜」

「ひゃ、ひゃら〜」

「あ、ん」



「やっ…はぁぁあ！
教官、ちょっと待っててください
刺激が強過ぎて…
あの、私…」

「うんっん
どうやら雪泉は
攻められる方が
感じるみたいだね」

「ひっっっ…
あの、その…」

あははは
あははは

あははは
あははは
あははは

あははは
あははは
あははは

「さて、体位を変えて
そろそろイかせてあげるよ」

「いえ、その…
今回は私が」

「大丈夫、今までで
今日の授業は及第点だから」

「…はいっ」





「あん...やっ...
おっぱい...おっぱい...
っ...」

「おっぱい...
おっぱい...おっぱい...
ん...やっ...ためっ」

おっぱい♡
おっぱい♡

おっぱい♡

おっぱい♡



「雪泉、そろそろイきさつたな」

「はっ...っ」

「私、もうイきさつてますっ」

「あっ...! な「これ」を「これ」で...すっ...すっ...!』

アッ

アッ

アッ



「はぁ…むっ…
雪泉、今回もよかったぞ」

「はっ…はぁ…
はい、ありがとうございます」

「ああ、だがまたまただな
次も

よろしくな」

「は…はっ…」

さて、と

催眠忍法も継続中で
持続性もあることが立証された。

雪泉との授業はそのままに

そろそろ次の子で

試してみたいんだけど…っつと

たしか、この辺りにいたような

調査によると

雪泉の学校と違う子で

詠（よみ）という子だ

外見がお嬢様っぽくて

さらにとてもよい胸（おっぱい）をもっているようです。

あつと、いたいた！
あの子だ！

DOWNTOWN STREET





よし、どうやって攻略しようかな

催眠忍法を使うにしても

何かとつかかりが欲しいし

少しでも気が引けて

誘えればいいんだけど

んん？





なにやら真剣に見ているな…
何をそんなに眺めているのか？
ちよつと回り込んでつと

うん...う？
もやしラーメン？

ええっと...



とっかかりは
これでいけるか？

「ちょっと、その君
少し話をいいだろうか？」

「はい？」

「なんでございませうか？」

「私は忍を育てる仕事をしてら
ちよっと君に協力を
お願いしたいのだけど」

「はあ？」

「もちろんタダとは言わない
ちよっと、そこでラーメンでも
一緒にどうだろうか？
もちろん『お礼』として
おこなせてもらおうよ」





「それで、」

「私はどうすればいいのでしょうか？」

「ああ、私は忍を育てるための特別な授業をしていてね、その手伝いをしてもらえるかな？」

「お手伝い…ですか？」

「そう、実際に授業を受けてもらって感想を聞かせてほしい」

「承知しました
もやしラーメン分は
きっちりお手伝いしますわ」





はい、成功しました。

もやしラーメンをご馳走してから
催眠忍法で色々と改変して
部屋までつれてきた。

それまでの道中

話をしてみたけど…

どうやらお嬢様ではないし

ちよつと

二面性をもってそうな子みたいだな

その辺りは気をつけなくては



「それじゃあ
早速、授業を始めようか」

ぽん

ぽん



「ささっと、授業に邪魔な服は脱いでしまおう」

「えっ？あーのっ？」

「ええっ……」

あーのっ

あーのっ



「あ……
こ、これは「
ゆるゆる」の「ゆるゆる」……」

「うわ……
も、も、授業に決まっ
たらじゃあ……」

はぁ



「今日は私の授業に
つきあってくれたらどうかな？」
約束は...する...かな？」

「えっ？
ちよっど...あ...
は、は...」

「そのおっぱいが

じゃあ、そのおっぱいとおっぱい

「おっぱいを君の中」に入ってるからな」

クク

「ひゃー...
さ、おっぱい...なんだよ...」

ク

「おっぱいの男の子」

「お、おっぱい...」

「おっぱいを大きくするんだよ...」

スト...





あーっ

あーっ

「はい…あの…
私の中に入ってきてますわ」

「それじゃあ入れるから
リラックスして、力を抜いて…」



「はあ…はあ…
あそこがなにか痛かったり
むずむずしたりしますわ」

「入ったよ…
よくがんばった」



「んっ…はっ…
はあ…
はっ…はっ…」

「さっさと…お尻を白く
して…お尻を
赤く…お尻を
赤く…」

どきどき

どきどき



シャワー

「あつからなう
どっかぬわ〜」
「あつ…えっ…
やっ…なんぞすの、」

びしょ濡れ



「後ろから身体を突かれて
私の身体の奥に
熱いものが
出たり入ったり」

「でも…身体の奥底で
なにかがむずむずしますわ」

ムズムズ
ムズムズ

ムズムズ
ムズムズ



カワカワ

「どうやら
後ろからが
好みたいだな
随分と
気持ちよさそうだし」
「あっ…んっ…
はっ…はっ…
そう、気持ちいいですわ」

ハッハッ

ハッハッ
ハッハッ



だらだら大きくなってきた
みたらだじ
強め「らっくわ」
「おっ...おっ...」

あー
おっぱい
んっ



はっはっ

はっはっ

「あぁ... 熱い...
お尻... 気持ちいい...」



アッ
アッ
アッ

「えっえっ？
あの…あの…」
「最後に、正面からしてよっか」



「やう、顔をさかしてよー」

「...ちやうどはなりました...まや」

「うんうん」

「いい表情になったわ」

ちやうど
まや

ちやうど
まや

「大丈夫
このままいかせてあげるよ」

ふんふん
ふんふん

「はあ…はんあ…
あの、手を」

「うんうん」

「手をこのまま
しっかりと握り締めておらませう」





「んんっ…あん…」

「…んんっ…あん…んんっ…あん…」

「それ…」

「な」が…な」が…あ…あ…」

「んんっ…」

「んんっ…」

んんっ…んんっ…

んんっ…んんっ…





「ヒューー...あはは...」
「ヒューー...あはは...」

ヒューー

ヒューー

ヒューー



「ふう…」

これで特別授業は終了だ
詠、協力に感謝するよ」

「はあ…ふう…
いえ、お役に立てたなら
嬉しいですよ」

ふわふわ



おっ
2つ♡

きゅっ
っ
っ

「あ、あの…
もしもよろしければ
また、お手伝いさせて
いただきますわ」